

**Оркестр « Аврора »  
Двадцать Первый Концерт**

アウローラ管弦楽団  
創立10周年記念  
第21回定期演奏会

2019年 **5月11日** (土)

すみだトリフォニーホール・大ホール





ごあいさつ

# Message

本日はお忙しい中、私たちアウローラ管弦楽団の演奏会にお越し頂き、誠に有難うございます。早いもので、当団が2009年に結成・船出をしてから、ついに創立10周年という節目の年を迎えることになりました。これまでの10年間、当団がここまで活動を続けて来られたのも、団員たちの弛まぬ向上心と、何よりもご来場頂いている皆様からの暖かいご声援とお力添えの賜と感謝しております。皆様のご支援を賜りまして、当団はここまで迎り着くことができました。当団を育てて頂いたことに、この場を借りて団員一同お礼申し上げます。今回は節目の演奏会となりますが、皆様のご支援に報いるべく、今後も更なる良い音楽を目指して、これまで以上に努力を重ねていこうと考えております。団員一同これからも感動をお客様に伝えられるような演奏を目指して参りますので、変わらぬご支援を頂ければ幸いです。

世の中に「趣味の社会人サークル」は数多の種類がありますが、私たちはその中から「オーケストラ演奏」を週末の余暇活動として選んだ者たちの集団です。多くのメンバーが幼少時代あるいは学生時代に楽器を手に取り、アマチュア・オーケストラの魅力に取りつかれて現在に至っておりますが、結果的に私たちは人生の伴侶として良い趣味を選ぶことができたと自負しております。(おそらく私はオーケストラを続けていなければ、今頃はきつとただの冴えない中年だったかもしれません。)

団員たちも長いオーケストラ活動の中で、時には様々な人生の転機(就職、転勤、結婚、出産、育児など)で、やむを得ず趣味の時間を中断せざるを得ないこともあります。それでもこの10年間、遠距離から何とか駆けつけたり、時間をかけて復帰してくれた団員がたくさんいて、私たちは今も共に音楽を奏でる仲間であり続けています。休団をきっかけに仲間がそのまま去ってしまう悲しい結末を迎えることなく、私たちのオーケストラにまた元気に帰ってきてくれる、そしてそんな彼ら・彼女らが帰ってきた時に、笑顔で「おかえりなさい」と言って迎えてあげることができる、そんな息の長いオーケストラを、これまで目指してきたし、これからもそうありたいと考えています。

様々な社会的ステータスを持ったメンバーが縁あって集い、共に一つのものに向かって進んでいく姿は美しく、また素晴らしい芸術作品に触れることで得られる感動の瞬間に立ち会えることに喜びを感じながら、私たちは日々の活動に励んでいます。社会人の集団ですので、時には喧嘩をすることもありますが、それでも同じ趣味を持った仲間たちと一緒に、これからも長い道のりを歩んでいくことができると願っています。

日本は世界屈指のアマチュア・オーケストラ大国であり、所謂「アマオケ」の存在は独自のサブカルチャーとして日本の文化に確実に根づいているのではないかと思います。その中でも都内は数百のアマチュア・オーケストラがひしめき合い、その様はまさに百花繚乱。週末には必ずどこかでアマチュア・オーケストラの演奏会が行われるほどの活況を呈しています。百戦錬磨の老舗名門オーケストラから若くて勢いのある新進気鋭の新興オーケストラまで、様々な団体が個性や技術を競い合う中で、私たちアウローラ管弦楽団は決して華々しい派手な活動をしている訳でもない地味な団体ではありますが、皆様には今後とも都内の様々なアマチュア・オーケストラの鑑賞をして頂きつつ、願わくばその中の1団体にアウローラ管弦楽団の名前を加えて頂ければ願っております。

オーケストラ活動を続けているからこそ、私たちは輝いていられるし、そんな素敵な人生を末永く過ごすことを目標にしています。また、私たちのようなアマチュア・オーケストラの演奏会にお越し頂いている、演奏会鑑賞という素敵な趣味をお持ちの皆様のご支援に支えられていることにも感謝しつつ、私たちがいつか楽器が演奏できなくなったら、ぜひ皆様とアマチュア・オーケストラの演奏会巡りを一緒にさせて頂ければ幸いです。

本日は私たちアウローラ管弦楽団の10年間の総決算となる演奏会です。拙いところも多々あるかとは思いますが、令和時代最初となる私たちの演奏にどうか最後までお付き合い頂き、本日の演奏会が新時代を迎えた新緑の季節の、実りあるひと時となって頂ければ幸いです。

アウローラ管弦楽団 嵯峨根 昌樹





ごあいさつ

本日はお忙しい中、アウローラ管弦楽団第21回定期演奏会にお越しいただきありがとうございます。2009年5月の第1回演奏会から丸10年、ここに21回目の記念演奏会を開催できますのは、ひとえにみなさまのあたにかいご支援のたまものと心より感謝申し上げます。

私がパンフレットにてご挨拶申し上げるのは、5年前の第10回定期演奏会以来となります。当時、節目の第10回ということで5年間の活動を振り返り、アウローラの軌跡を航海に例え、「メンバーはすっかり入れ替わったが、いくつもの試練や転機を経た今、アウローラの航路にもう迷いはない。ときには荒波におそわれ座礁しかけることもあるかもしれないが、縁あって集まった仲間たちとともに航海は続く」と記しています。色々ありながらもようやく凧の海に落ち着いたアウローラの明るい未来を思い描きつつ推敲したことを思い出します。演奏会もそれまでの5年間を総括するような、忘れがたいものとなりました。

ああ、この素晴らしい仲間たちと、これからもずっと！

・・・ところが、希望に満ちあふれた幸せな時間は、あっけなく過ぎ去ります。

翌11回定期演奏会で、いきなり、ごっそり、団員がいなくなったのです。

「ときには」どころではなく、さっそく特大の荒波におそわれる事態となりました。

これほどアマチュアオーケストラが数多くある中で、常に潤沢に演奏者を集めるのはなかなか大変なことです。これはアウローラにとっても創立以来不変の課題です。

しかし第11回で団員を大きく減らしたことが、アウローラをこれからも存続させる(=団員を集める)にはどうすべきか、どうあるべきかについて、それまで以上に真剣に考え取り組む起爆剤になったように思います。

お客さまの心に届く演奏をするためにはまず、団員が自然に集い楽しめる場所でありたい。そうした想いが徐々に実り、順調に新たな仲間が増え、団員の顔ぶれも安定し、団員同士のつながりも着実に強く濃くなっていきました。

この10年を振り返って、「あの頃は良かった」ではなく「今がいい」と思える幸せ。それは、こうして良い仲間にも恵まれたことはもちろん、アウローラがどんな状態にあっても変わらず客席で見守ってくださる多くのお客さまの存在が、私たちの大きな支えとなり成長をあと押ししてくださったからに他なりません。

10年という年月を経てもなお私たちは未熟で、これからも紆余曲折があることでしょう。

しかし、凧ではなく荒れた海でこそ乗り越えるための力が得られるものです。荒波を恐れることなく、縁あって集まった仲間たちとともに航海を続けていきます。

そんなアウローラを、これからも温かく見守っていただければ幸いです。

アウローラにとって、ショスタコーヴィチの交響曲は初めての挑戦となります。

レニングラード。かつてこの地が戦火に包囲される中、極限状態のオーケストラが命がけて演奏したこの大曲を、私たちも全力で演奏します。拙い演奏ではありますが、ショスタコーヴィチがこの曲に込めた故郷への想いを、みなさまにお届けできますように。

アウローラ管弦楽団 コンサート・ミストレス 松本 美穂





曲目紹介

# Program

A. K. グラズノフ

Александр Константинович Глазунов

祝典序曲

Торжественная увертюра

P. I. チャイコフスキー

Пётр Ильич Чайковский

バレエ音楽「白鳥の湖」より

Балет «Лебединое озеро»

- |             |                  |
|-------------|------------------|
| 1. 情景       | Сцена            |
| 2. ワルツ      | Вальс            |
| 3. ハンガリーの踊り | Венгерский танец |

～ 休憩（20分） ～

D. D. ショスタコーヴィチ

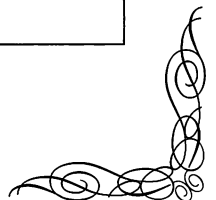
Дмитрий Дмитриевич Шостакович

交響曲第7番ハ長調「レニングラード」

Симфония №. 7 «Ленинградская» до мажор

- |      |                            |
|------|----------------------------|
| 第1楽章 | Allegretto                 |
| 第2楽章 | Moderato - Poco allegretto |
| 第3楽章 | Adagio                     |
| 第4楽章 | Allegro non troppo         |

演奏中は客席の照明が暗くなる為、パンフレットの文字が読みづらくなります。パンフレットの曲目解説などは演奏前に目を通して頂き、演奏中はどうかステージ上の私たちの姿を見ながら、演奏に耳を傾けて頂ければと思います。







指揮者紹介

# Conductor

田部井 剛 (TSUYOSHI Tabei)



早稲田大学商学部卒業。東京音楽大学指揮科研究生修了、東京芸術大学指揮科卒業。これまでに指揮法を遠藤雅古、神宮章、武藤英明、佐藤功太郎、ジェームズ・ロックハート、広上淳一、三石精一の各氏に、ピアノを岩津章子、秦はるひ、藤田雅の諸氏に師事。沖縄国際音楽祭出演。東京芸大在学中にはレハールのオペレッタ「メリウイドウ」を全曲指揮。

1999年には日本フィルハーモニー交響楽団にて巨匠エリック・ハイドシェック氏とマルセル・デラノワ作曲「5月の協奏曲」を協演・指揮(日本初演)。ソリストであるハイドシェック氏は、田部井の読譜能力の高さ、また叙情的でリズムに溢れた演奏に対し、「ヤング・トスカニーニ」と讃えた。2002年には「モーツァルト名曲コンサート」にて再びハイドシェック氏と共演、新日本フィルハーモニー交響楽団を指揮。青柳いづみこ著「ピアニストがみたピアニスト」<Pianistes vus par pianiste>(白水社刊)では、そこでの協奏曲における絶妙な指揮ぶりについて著述されている。

最近では室内合奏団「カメラータ・ジオン」(Camerata Jion)を結成し、ヴァイオリニスト川畠成道、チェリスト青木十良の諸氏と共演するなど積極的な活動をしている。2005年にはハイドシェック夫妻との国内ツアーを成功させ話題を呼んだ。そのライヴ録音が仏アンテグラル社(Integral Classics France INT 221.156)よりリリースされている。また、カテリーナショット、宗次郎、クミコ、岡本知高、江戸家子猫などジャンルを問わず内外の様々なアーティストと共演し、高い信頼が寄せられている。

オペラの分野においては、團伊玖磨『ちゃんちき』、モーツァルト『フィガロの結婚』、『魔笛』など指揮し、高い評価を得た。

このほか群馬交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティフィルハーモニック管弦楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、東京佼成ウインドオーケストラ等を指揮。2006年にはチェコの名門、ターリヒ室内管を指揮し、モーツァルトの交響曲をレコーディング、そのCDがキングインターナショナルよりリリースされている(STUDIO FLORA B-2704)。

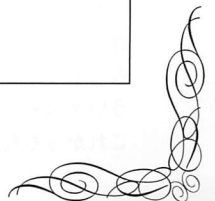
2010年には日本フィルハーモニー交響楽団にて文化庁主催公演(計9公演)を指揮した。2012年より桐蔭学園「第九の会」音楽監督を務める。

また、ピアニストとしても非凡な能力を発揮し、ウィーンフィル首席チェロ奏者フリッツ・ドレシャル(Fritz Dolezal)、上村昇、勝部太、寺谷千枝子、平松英子諸氏と共演している。2009年にはコントラバス奏者、白土文雄のレコーディングにチェンバロ奏者として参加、Harmony社より「モノログ」がリリースされた(HCC 2049)。2012年にはドビュッシー生誕150周年に際し、浜離宮朝日ホールにて行われた、文学キャバレ「黒猫」とその仲間たち、また、カワイコンサートサロン「パウゼ」にて行われたドビュッシーフェスティバル2012に出演、青柳いづみこ氏と連弾曲を演奏、好評を博した。

2009年、上毛芸術文化賞受賞。

今回の演奏会の練習を行うにあたり、以下の諸先生方にご指導を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。(以下敬称略)

- ・松川 智哉 (指揮者:合奏指導)
- ・原 孝明 (新日本フィルハーモニー交響楽団ヴァイオリン奏者:弦楽器指導)
- ・野田 祐介 (群馬交響楽団クラリネット奏者:木管楽器指導)





オーケストラ紹介

# Orchestra

アウローラ管弦楽団 Оркестр «Аврора»



ロシア音楽を中心に演奏するアマチュア・オーケストラとして2009年に結成。「アウローラ」とはロシア語で“暁の女神”を意味し、転じて“夜明け”を表す。これまでの10年間に20回の定期演奏会、9回の室内オーケストラ演奏会、4回の特別演奏会を開催。演奏してきた曲数は96曲に及ぶ。

結成のきっかけは、公式には『コンサート・ミストレスの「チャイコフスキーの交響曲第1番を演奏するオーケストラを作りたい!」という言葉に賛同したメンバーが発起人となって立ち上げた。』という設

定になっている。しかし後日になって、実は当時コンサート・ミストレスは曲自体を知らなかったという事実が発覚し、取り巻きの発起人たちの勘違いと思ひ込みで作られたオーケストラであったことが露呈する。

半年という短い準備期間で、突貫工事で立ち上げたオーケストラの為、結成以来「役員」や「運営スタッフ」のような組織だったものは存在しないが、これまで活動がそれなりに維持できている為、「別にこのままでいいか」という暗黙の了解の元、現在に至る。団長を置かず、係などの運営組織体系も存在しない自主運営の団体であるものの、当団の創業者であるコンサート・ミストレスのリーダーシップと精神的な支えの元、彼女を中心とした独特の体制が形成され、これまで10年間に渡ってオーケストラ活動を維持している。

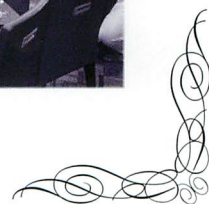
団員数は約70名。男女比はほぼ1:1。基本的には女性陣が主導権を握り、男性陣は草食系が多数派を占める。特定の母体を持たず、また特定の年代や出自に依存しないことで、結成から年月を重ねる度に団員構成の幅を少しずつ広げてきた結果、結成当初は若いメンバー中心で勢いに任せて突っ走ってきた当団も、今ではようやく幅広い年齢層、多種多様な社会的バックボーンや価値観を持った仲間たちが満遍なく集まって共に音楽を奏でる、真の意味での「社会人オーケストラ」に成長しつつあるものと自負している。

一方で「ビジュアルのアウローラ」と周りから羨望されるようなオーケストラになりたいという願望の元、演奏のみならず見た目もスタイリッシュになるべく、日々研鑽に励んでいる。その集大成は、冬期定期演奏会の女性陣の華やかなカラードレスに結実される為、ぜひ次回(2020年1月11日)の定期演奏会にもお越し頂きたい。

2008年4月29日、創立メンバーの一人がコンサート・ミストレスに声をかけた(ナンパした)ところから始まった、かなり不純な動機で結成されたこのオーケストラが、ここまで成長するとは10年前には想像できませんでした。思いつきでの声かけや勘違いなどの偶然の積み重ねとはいえ、創立者となった二人の出会いがきっかけでオーケストラの小さな芽が生まれ、少しずつ人が集まって、多くの仲間たちとの出会いと別れを繰り返しながら、時間をかけて枝葉を増やし、樹木に育ち、本日の公演を迎えるに至りました。偶然が生み出した10年間、その軌跡に感謝しています。

若さと勢いに任せて結成されてから早10年、歴戦メンバーから最新鋭メンバーまで、新旧混交、老若男女が集う、社会の縮図とも言える立体感のある人員構成のオーケストラになりました。10年間におよぶ「人と人の繋がり」が、アウローラ管弦楽団の原動力でした。音楽がつかない縁に感謝しつつ、これからもお互いを尊重し合い、末永く音楽を共に奏でていくことのできる、仲の良いオーケストラでありたいと願っています。

設立当時のメンバーも皆等しく年輪を重ねてきて、月日の流れや郷愁に想いを馳せることも多くなりました。しかし、ここからさらに10年後、20年後、願わくばこれからも一緒に演奏を続けていき、新しい令和の元号さえ過去のものになってしまう程の将来、まだ残っている古参メンバー同士で、「そういえばあの頃は・・・」と昔話をするのが、私たち設立メンバーの夢であり、これからも長く続くであろう人生の目標です。





出演者

# Member

♪首席奏者 \*賛助出演 †団友

## Concert Master

松本 美穂 ♪

## 1st Violin

上田佳津子  
†大越 智  
\*河合 佑華  
東海林真弓  
高山日実子  
棚田真規子  
†戸川 悠  
中務 愛子  
名郷根文香  
馬場 和音  
原 瑞希  
福田 壮一  
†本郷 尚子  
\*本田 佳奈

## 2nd Violin

大沼 泰秀  
大藤 千佳  
†大和 和枝  
杉山 慧美  
鈴木 真之  
大堂 悠洋  
高橋 佑歌  
†戸倉 翔一  
古田 彩乃  
前野 敬一  
水野 光  
山口 真紀  
横手麻衣子 ♪

## Viola

†石原 里奈  
梶谷 美香  
†小林 葵  
佐野 裕貴  
篠塚 晋吾  
清水 幸代  
富岡 友貴  
三上 朋美  
山田 直敬 ♪  
†山本 優輝  
與儀喜代太

## Violoncello

市川 周子  
高田 音葉  
戸ヶ崎祐太 ♪  
\*永富さおり  
幡鎌さゆり  
福田 勝美  
†藤元 義久  
水口 尚子  
†宮崎比呂志

## Contrabass

戒田 英輝 ♪  
坂田陽太郎  
\*杉木 華  
鈴木 康浩  
†田口 紀子  
戸田 利忠  
永峯 豊

## Flute

†遊馬 陽子  
大槻 郷子  
齋藤 裕介 ♪  
嵯峨根節笑

## Oboe

石橋 慶太 ♪  
江尻 佳代  
田中 崇

## Clarinet

†大藤 由紀 ♪  
†押見 郁子  
菅 清子  
松村 恭子

## Bassoon

大島 彩子  
†大島 誉史  
佐藤 寛治 ♪

## Horn

†久保 早織  
小林 大輔  
嵯峨根昌樹 ♪  
†東海林彩加  
†竹本 龍平  
西野 直  
†松田 奈女  
†宮崎 藍  
矢澤和歌子

## Trumpet

†磯部喜三郎  
伊藤 冴子  
伊藤 大河 ♪  
稲葉 麻衣  
†遠藤 優  
清水 麻衣  
†濱口 知也  
†程内 隆哉

## Trombone

伊木 史紀 ♪  
佐藤 映里  
†鈴木 香織  
†名屋 佑治

## Bass Trombone

高橋 重典  
†渡辺 一裕

## Tuba

†井上 高明

## Percussion

†小川 敏弘  
†加藤 綾子  
†加藤 浩樹  
清水 仁美 ♪  
常石 堅司  
†永田麻衣子  
†三宅 優  
†和田 英恵

## Harp

\*大木 理恵  
\*佐藤理絵子

## Piano

†元吉 拓也



2019年3月3日 レニングラード交響曲の初回練習





ターニャの日記

Женя  
умерла  
28 дек в  
12.00 час  
утра  
1941г

1941年12月28日 午前12時、ジェーニャが死んだ。  
Женя умерла 28 дек в 12.00 час утра 1941 г.

Бабушка  
умерла  
25 янв  
3 ч дня  
1942г

1942年1月25日 午後3時、おばあちゃんが死んだ。  
Бабушка умерла 25 янв. 3 ч. дня 1942 г.

Лека  
умер  
17 марта  
5 ч утра  
1942г

1942年3月17日 午前5時、リョーカが死んだ。  
Лека умер 17 марта в 5 час утра в 1942 г.

Дядя Ва-  
ся умер  
13 апр  
2 ч ночи  
1942г

1942年4月13日 深夜2時、ヴァーシャおじさんが死んだ。  
Дядя Вася умер в 13 апр 2 ч ночь 1942 г.

Дядя  
Леша  
умер  
10 мая  
4 ч дня  
1942г

1942年5月10日 午後4時、リョーシャおじさん  
Дядя Леша 10 мая в 4 ч дня 1942 г.

Мама  
в 13 мая  
в 7.30  
час  
утра  
1942

1942年5月13日 午前7時半、ママ  
Мама в 13 мая в 7.30 час утра 1942 г.

Савиче  
- все  
умер  
- все  
осталась  
одна  
Таня

サヴィチェフ家は死んだ  
Савичевы умерли.

みんな死んだ  
Умерли все.

残ったのはターニャだけ  
Осталась одна Таня.

# Program note

## 【第1部】戦火の街に復活したオーケストラ演奏会

祝典序曲

A. K. グラズノフ

バレエ音楽「白鳥の湖」より

P. I. チャイコフスキー



白い地獄(1942年、レニングラード)



♪ 1942年4月5日 戦火のレニングラードにて

その日、ロシア第二の都市レニングラード(現サンクトペテルブルク)が誇るクラシック音楽の殿堂、フィルハーモニーホールは、満員の聴衆で埋め尽くされていました。聖地に相応しい豪華絢爛な輝きを放つはずのシャンデリアは、自慢のクリスタルガラスが取り外されて惨めな裸電球を晒し、電気がほぼ通らない会場内は薄暗く、暖房も効かない有り様。遠くからは砲撃の音が絶え間なく轟き、建物はその度に鈍い振動に軋みました。ポロ切れと見紛う汚れた厚着のコートを着たまま席に座っている市民たちは皆、顔は頭蓋骨に皮膚だけが貼りついたように痩せこけ、窪んだ目の奥から生氣のない瞳を覗かせ、袖先から見える手はまるで骸骨のようでした。地獄の住人のようなその姿は、数ヶ月に及ぶ飢餓と極寒によって死の間際まで追い詰められた市民たちの窮状を伝えるに十分過ぎるものでした。

冷凍庫のような冷えきった空間に人々が身を寄せ合う様子は、まるで建物全体が「市民の棺桶」のようでした。しかしこれからここで行われるのは葬儀などではなく、4ヶ月ぶりに行われるオーケストラの演奏会だったのです。集まった人々は寒さに震えながら、この芸術の都に数ヶ月ぶりにオーケストラの響きが鳴り渡る「その時」が訪れるのを待っていました。

いよいよオーケストラ奏者たちの入場。彼らもまた、集まった市民たちと同じように骨と皮だけの状態でした。オーケストラ奏者たちも、同じように飢餓と極寒に苦しんだ市民の一人でした。そして、あり合わせて仕立てた正装に身を包んだ指揮者エアスベルクが入場。振り下ろされるタクト。そこから流れたのは、みすぼらしい見た目は全く対照的な、華やかな祝祭の響き。零下に震える人々の心を暖める、壮麗なオーケストラのハーモニーが会場を包み込み、市民の心に情熱を灯しました。

オーケストラが渾身の力で演奏しているのは、地元レニングラードで業績を残した巨匠グラズノフが作曲した「祝典序曲」。戦時下のレニングラードで、4ヶ月ぶりに開催された演奏会のオープニングが祝典の音楽とは、なんと象徴的です。時は第二次世界大戦中、ナチス＝ドイツがソヴィエトに侵攻し、レニングラードが包囲・封鎖されていた「レニングラード包囲戦」の真只中。そのような戦時下で、このような芸術的な催しが行われたのです。空襲をかいくぐりながらホールに辿り着いた市民たちは、再び街に鳴り響いたオーケストラの音に、惜しめない拍手を送りました。

1942年4月5日、戦時中のレニングラードにあった現実の出来事。これは20世紀クラシック音楽界の、小さな奇蹟でした。







## 曲目解説

### ♪1941年6月22日 独ソ戦の始まり、そしてレニングラード封鎖

人類史上最大の悲劇である第二次世界大戦は、日本では主に太平洋戦争によって記憶されていますが、ヨーロッパではドイツやイタリアといったファシズム国家による侵略戦争を指し、特にソヴィエトでは、ヒトラー率いるナチス＝ドイツと対峙した「大祖国戦争」と同一視されます。(ちなみにロシアでは1812年のナポレオン率いるフランスの侵略戦争を「祖国戦争」と呼び、この「大祖国戦争」と合わせて二度の侵略戦争に打ち勝ったことを誇示することがままあります。)

ヒトラー率いるナチス＝ドイツが、ドイツとソヴィエトの間で交わされていた相互不可侵条約を一方的に破棄してソヴィエト国内に侵攻したのは1941年6月22日のことでした。相互不可侵条約を信じて疑っていなかったソヴィエトの最高指導者スターリンは、ヒトラーの裏切りを全く予見できなかったようで、戦争の備えを進めていなかったソヴィエト軍はナチス＝ドイツの電撃的な侵攻になす術もなく壊滅、敗走を重ねます。慌てたスターリンは主要な政府機関や重要文化組織などをシベリアの奥地まで疎開させますが、ヨーロッパに近くナチス＝ドイツ軍の到着が早かったレニングラードは疎開の完了が間に合わないままに包囲され、封鎖の輪が閉じられてしまいました。ここに、およそ900日に及ぶ「レニングラード包囲戦」が始まります。

完全包囲されたレニングラードに於いて、街に残された唯一のオーケストラは、ラジオ局に所属する放送交響楽団(現サントペテルブルク交響楽団のことで、以降は「ラジオ・シンフォニー」と呼称します)だけでした。ムラヴィンスキー率いる「国家の至宝」レニングラード・フィルハーモニー管弦楽団や、パレエの殿堂マリンスキー劇場といった重要文化組織は安全な都市に疎開できましたが、このオーケストラは団員もろとも包囲の輪の中に取り残されたのです。(実際にはオペレッタ用の軽音楽の楽隊、民族楽器オーケストラなども残されていたようですが、ここでは触れません。)

### ♪ラジオ・シンフォニーの奮闘と沈黙

ナチス＝ドイツは連日、「レニングラードは明日にも陥落する!」、「レニングラードをこの地上から消滅させる!」といった類のヒトラーの濁声の演説を全ヨーロッパに向けて放送で喧伝し、実際に連日連夜の空襲爆撃をレニングラードに対して行いました。レニングラードのラジオ放送局はそれに対抗するように、あえてラジオ・シンフォニーの生演奏(チャイコフスキーの交響曲第5番など)をレニングラ

ードの街中のみならず全ヨーロッパに向けて放送し、「我々は日常生活に於いて芸術音楽を楽しむ余裕があり、ナチス＝ドイツ軍の攻撃など効いていない!」というアピールを(プロパガンダ的な意味合いも持って)行い、芸術の都としての意地を見せていました。オーケストラの存在が、情報戦として用いられたのです。

しかし、そのような虚勢が果てるのも時間の問題でした。ナチス＝ドイツに包囲され、外部からの補給路を完全に遮断されたレニングラードは、次第に食糧と燃料が欠乏し始めます。特に食糧不足は深刻でした。市から配給されるパンは日に日に量が減り、やがて訳の分からない「おが屑」などが混じった、とても人の食べられないような劣悪な代物となり、味のしない薄いスープには野菜の切れ端が一本浮かぶだけとなりました。街中の犬猫はすぐに食べ尽くされ、草木も食用に駆りつくされているうちに秋が深まり枯れ果ててしまいました。人々はやがてベルト等の革製品を煮込んで無理やり噛みついたり、家の壁を剥がして裏側についていた糊をこそいで舂めるような悲惨な状況に追い込まれます。現代日本に生きる私達には想像できない、「餓死」という現実が迫ってきたのです。

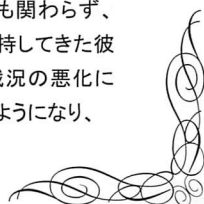
飢餓が襲い始めた人々に追い討ちをかけるように、10月には早くも本格的な冬が到来します。ナポレオン軍をも壊滅させたロシアの冬将軍は想像を絶するものです。街中を氷点下数十度の激しい吹雪が容赦なく襲いかかり、燃料がなくなった為に屋内であっても暖房が効かず室内温度は0度以下となります。木材や紙類などはあつという間に燃やし尽くされました。燃料がなくなった車は市内の至る所に無残に放置され、電気も止まった為に市電も立ち往生して雪に埋もれたまま野ざらしとなりました。街中の灯からは光が消え去り、夜は漆黒の闇に覆われました。

飢餓と極寒が市民を襲う日々。飢えて骸骨のように痩せ細った人々は毎日のように倒れてゆき、街中には至る所に死体が溢れました。あまりにも多くの市民が亡くなり墓も足りなくなった為、市は郊外に大きな穴を掘り、亡骸は次々と穴の中に放り投げられ、埋められていきました。

### — 白い地獄 —

飢餓と極寒に晒された死の都レニングラードは、最終的に100万人近い餓死者・凍死者を出す、文字通り地獄絵図と化しました。

ラジオ・シンフォニーの奏者たちも状況は同じでした。連日の爆撃や日に日に減っていく食料事情にも関わらず、必死に演奏会やラジオ収録で演奏活動を維持してきた彼らですが、やがて次々と奏者が倒れ、また戦況の悪化に伴い音楽家であっても容赦なく召集がかかるようになり、



## 曲目解説

男性奏者は戦闘要員や塹壕掘り要員として戦地に送られ、女性奏者は兵器工場に従事するよう命じられ、一人、また一人と人数が減っていきました。演奏活動も次第に縮小され、演奏会は12月14日を最後に公演が中止となり、そして12月31日深夜に行われたラジオ放送を以て、オーケストラ活動は完全に停止しました。

ラジオはもはや音楽を流すことはなく、放送停止時に流れる、無機質なメトロノームの音だけが、いつまでも、いつまでも秒針を刻んでいました。レニングラードに存在する全ての命あるものが絶滅するまでのカウントダウンのように。

### ♪ターニャの日記

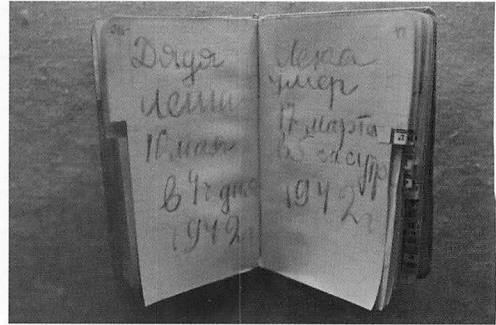
「一人の人間の死は悲劇だが、数百万の人間の死は統計上の数字だ。」

これは、スターリンの言葉と伝えられています。ソヴィエトは大祖国戦争で2000～3000万人もの自国人の死者を出しました。この死者数は第二次世界大戦に於ける全ての国の中で最も多く、有史以来続いてきた人類史上の全ての戦争でも最多です。

現代に生きる私達が過去の戦争を語る場合、どこの街が陥落した、犠牲者は何万人だった等、とかく俯瞰的・統計的な視点で戦争の内容を判断し、その被害規模だけに目を向けてしまいがちです。しかし戦争をリアルタイムで体験していた人々にとって、戦争とは統計上の数字ではなく、自分の身の回りに起こった「悲劇の体験」以外の何物でもありません。近所の知り合いが死んだ、友人が死んだ、恋人が死んだ、家族が死んだ、そういった「個人の悲しみ」が、戦争です。私達が歴史の教科書で習う、古今東西の戦争の全て、その裏には必ず、戦争に巻き込まれた一人一人の人間の悲しみがありました。人間の死を統計上の数字と語ったとされるスターリンには見えていませんでした。戦いの最前線にいる兵士一人一人に名前があったことを。戦争に巻き込まれた市民一人一人に名前があり、人生があったことを。

冒頭の「ターニャの日記」は、戦争に巻き込まれた幼い少女が残した悲劇の記録です。レニングラード封鎖の飢餓と極寒の中で、12歳のごく平凡な一人の少女が綴った、日記というにはあまりにも短く、あまりにも悲しい、わずか9ページの、家族の死の記録。それは決して統計上の数字ではなく、親しい人々を次々と奪われていく少女の、一人の人間の悲しみが溢れています。

### ターニャの日記 ～ ひとりの少女の悲しい記録



ターニャは家族を看取った後、疎開先で短い生涯を閉じ、少し遅れて家族のもとに旅立ちました。

### ♪再び1942年4月5日

1941年末に活動を停止したはずのラジオ・シンフォニーは、しかし1942年4月5日には4ヶ月ぶりの演奏会を満員の聴衆の前で再開するところまで復活を遂げることができました。ナチスドイツの包囲が解けた訳ではなく、気温は4月でも氷点下を下回ります。オーケストラは、如何にして復活し、この日の演奏会までこぎつけたのでしょうか。

拍手喝采に終わったグラズノフの「祝典序曲」に続いて演奏されたのは、誰もが知るチャイコフスキーのバレエ「白鳥の湖」から、「情景」、「ワルツ」、「チャルダッシュ」の3曲でした。ホール中に響くチャイコフスキーの有名な旋律、そして一転して始まる優雅なワルツ。しかし「ワルツ」を演奏している時、オーケストラ奏者たちの頭の中には、ほんの1ヶ月前までの、音楽から引き離されていた忌まわしい記憶が蘇っていました。

完全に停止していたラジオ・シンフォニーに再生のきっかけを与えたのは、意外にもレニングラードの最高指導者、ジダーノフによる「鶴の一声」でした。戦後、音楽家をはじめとする芸術家たちに厳しい芸術弾圧を行った、あの悪名高い「ジダーノフ批判」の張本人です。一説には3月の初頭、僅かながらに電力が回復したにも関わらず、復活したラジオのスピーカーからひたすら流れ続けるのがメトロノームの乾いた音だけであったことに苛立ったジダーノフが癲癇を起こし、衝動的に電話を取ってラジオ・シンフォニーに対して演奏活動を再開するように命じたと言われています。

## 曲目解説

思いがけずレニングラードの最高指導者から活動再開のお墨付きをもらえたラジオ局は、すぐさまオーケストラ奏者を集め始めます。管理国家ソヴィエトに於いて最高責任者の指令は絶対であり、芸術音楽の存在価値など理解しようとしてもいない軍部も、スターリンの後継者とも言われるジダーノフの指令に逆らえるはずはなく、オーケストラの再開は市の最優先事項として進められました。

とはいえ、指揮者エリヤスペルクほか多くの奏者は極度の栄養失調で入院している有り様であり、戦線に赴いたままの奏者、死の淵にあり演奏など不可能な奏者、そして飢餓と極寒を乗り越えられずに亡くなった奏者がいる中(記録によるとこの時点で27名の奏者が餓死または凍死していました)、まともに演奏ができる者はほとんどいませんでした。ラジオ局は放送を通じて、市内に残っていた楽器奏者を片っ端から召集し、何とか生き残ったメンバーをかき集めて40名編成のオーケストラを仕立て上げます。

3月30日、マイナス15度の強烈な吹雪の中、暖房もろくに効いていないラジオ局のスタジオに集まった半死半生の奏者たちによる初のリハーサルは、悲惨極まりないものでした。電気も燃料も食糧も何もない中で、数ヶ月ぶりに楽器を手にした奏者たちによって再開された合奏練習。本来であれば楽器を自在に操れるはずの名手たちは、飢えにより力が入らず、寒さに震えて指が動かず、管楽器は息もできず、出てくる音は無残な雑音ばかり。彼らの屈辱と苦悩は想像に余りあります。結局、この日の練習は開始後わずか40分で中止せざるを得ませんでした。その悲惨な初リハーサルの練習曲が、まさに「白鳥の湖」の“ワルツ”だったのです。

しかし、奏者も指揮者エリヤスペルクも諦めませんでした。苦しむレニングラード市民に音楽を届けたい、希望の灯火となりたい、そんな不屈の想いが肉体的困難を凌駕し、僅かな練習の日々で、少しずつ、アンサンブルもまとまり始め、演奏にも力が戻り始めました。

そして4月5日の演奏会。もちろん万全のコンディションにほど遠い状況には変わりなかったはずですが、それでも封鎖下にありながらついに演奏会の再開にこぎつけ、人々の前で再び演奏できたという奏者たちの喜びは、何物にも替え難いものだったでしょう。初回練習では途中で力尽きてしまった“ワルツ”を演奏しきった後、さらに続く“チャルダッシュ”で華やかに演奏を締め、市民は彼らの熱演に惜しみない拍手を送り続けました。

これが、4ヶ月ぶりに復活したオーケストラの演奏会でした。過酷な条件の中、音楽が、戦争に苦しむ人々の希望の灯となった瞬間でした。この演奏会は、戦時下の地獄の中で起きた小さな奇跡だったかもしれませんが、レニングラード市民はそんな奇跡から紡がれた音楽に大きな希望を抱き、包囲下で生き続ける為の心の糧としたのです。



エリヤスペルク指揮、ラジオ・シンフォニーの演奏による復活演奏会の様子







## 【第2部】20世紀の記念碑 レニングラード交響曲

交響曲第7番ハ長調「レニングラード」 D.D. ショスタコーヴィチ



戦時下のラジオ・シンフォニーの活動を今に伝える戦争博物館に残る、当時の奏者たちの楽器

資料提供： Санктペテルブルク戦争博物館



### ♪ ショスタコーヴィチとレニングラード

時計の針を巻き戻します。

今でこそ「20世紀最大の作曲家」として揺るぎない評価を獲得しているショスタコーヴィチですが、第二次世界大戦の開戦当時はまだ30代の若手作曲家であり、数年前に書いた交響曲第5番が大ヒット作になった一方で、続編となった交響曲第6番は評判が芳しくなく、また若い頃には政府当局から表立って批判を受けたという「前科」もあって、不安定な地位にありました。そんなショスタコーヴィチがナチス＝ドイツ侵攻の一報を知ったのは、レニングラード音楽院で学生たちの試験監督に立ち会っている最中に緊急放送されたラジオを聞いてのことでした。

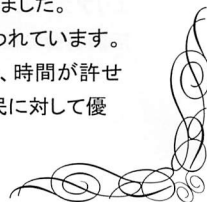
ショスタコーヴィチは熱心な社会主義者という訳ではありませんでしたが、祖国は愛していました。開戦の知らせを受けるや否や、彼は愛国的な衝動に突き動かされて交響曲第7番の作曲に着手します。ナチス＝ドイツが迫り来る中で書かれたこの交響曲は、その副題が示すように、ショスタコーヴィチが生まれ育ち、限りない愛情を抱いていた芸術都市レニングラードに捧げられています。ショスタコーヴィチはこの街を守るために人民軍への入隊を志願し、毎日のように市の郊外にある要塞の建設に赴き、ラジオで愛国的な演説をふるって市民を鼓舞し、そして音楽院の屋上

で寝ずの見張り番を務めながら、戦時下の緊迫した状況で極めて愛国的な情熱を注いで、この壮大な第7交響曲の筆を進めていたのです。

ショスタコーヴィチはナチス＝ドイツが迫り来る状況に於いても、愛する街レニングラードから離れるつもりは毛頭なかったようです。しかし既にそこその知名度にあった彼のような著名人が街に残ることを政府が許すはずもなく、結局は当局によって家族ごと強制的に疎開されてしまいます（結果的には、そのおかげでショスタコーヴィチは封鎖されたレニングラードの飢餓と極寒の地獄から逃れることができたのですが）。

ショスタコーヴィチは疎開先のクイビシェフで交響曲第7番を完成させます。それは1941年の暮れ、まさにレニングラード市民が飢餓と極寒に苦しみ、ラジオ・シンフォニーが演奏活動を停止させる直前の12月27日のことでした。初演はやや期間を置いた翌1942年3月5日にクイビシェフにて、一緒に疎開していたポリシヨイ劇場管弦楽団によって政府の一大イベントとして華々しく催され、その様子は政治的プロパガンダとして全世界に発信されました。

独裁者スターリンは音楽に明るかったと言われていいます。開戦前はオペラ・バレエ劇場にも足繁く通い、時間が許せばオーケストラのリハーサルさえ見学し、市民に対して優



## 曲目解説

れた芸術音楽を届けるべくロシアの各地、それぞれシベリアの僻地に至るまで歌劇場やオーケストラを組織させるといふ「功績」を残しました。指揮者ムラヴィンスキーがオーケストラ奏者の給与が安いことをスターリンに直訴した際には、その要求を聞き入れて給与を大幅に改善したというエピソードも残っています。

そんな彼はショスタコーヴィチの新作交響曲に政治的な価値を見出しました。初演に続き3月29日には首都モスクワで2回目の演奏会を行うと同時に、この作品を国外に広く「輸出」する戦略に打って出ます。特に海を越えたアメリカではこの交響曲は熱狂的に迎えられ、一大社会現象にまでなりました。レニングラード交響曲は、「憎きファシズムに対抗する英雄的交響曲」として世界中で話題となり、単なるクラシック音楽の新作という枠を越え、もはや「国際的な事件」にまでなっていたのです。

しかしそれらの出来事があったという事実や、実際の演奏の放送・録音は、ショスタコーヴィチがこの交響曲で勇気づけたいと願っていた、最も大事な街レニングラードには届いていませんでした。電力が途絶えていたレニングラードでは、初演があったことさえ知る由がなかったのです。

♪ 1942年8月9日 レニングラード交響曲 現地初演の奇跡

ラジオ・シンフォニーが復活演奏会を成功させた1942年4月。地獄の冬を乗り越えたレニングラードでは引き続き戦時下の緊張が続いていたものの、緑が芽吹く季節を迎えるにつれて食糧事情などは改善していきました（戦況も一進一退ながら若干は好転していました）。ラジオ・シンフォニーも演奏活動をさらに増やしていく中で、ついに彼らはある決断をします。レニングラードの為に書かれたにも関わらず、レニングラード以外の地で演奏されてしまっている、あのショスタコーヴィチの交響曲第7番を、この曲が捧げられた街、即ちレニングラードで、自分たちの手で初演しよう、と。



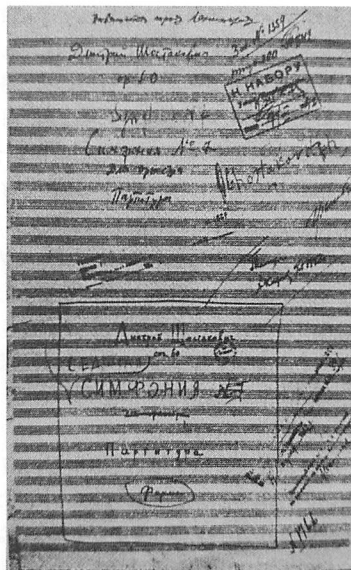
ナチス＝ドイツ軍の攻撃をかいくぐりスコアを空輸したパイロットたち

実現に向けたハードルは高いものでした。まずナチス＝ドイツ軍の包囲をかいくぐって楽譜を取り寄せることが最初の壁でしたが、これは軍部の協力もあって何とか特別輸送機で極秘裏にレニングラードに持ち込むことに成功しました。しかし届けられたのは指揮者用の総譜（スコア）のみであった為、オーケストラ奏者に必要なパート譜は、物資が不足する中での作成を余儀なくされました。

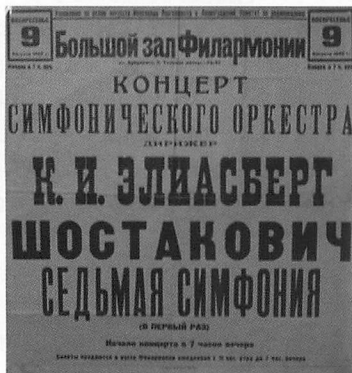
さらにナチス＝ドイツに包囲されていたレニングラードでは、外部の演奏録音を入手する手段などなく、指揮者エリ阿斯ベルクもオーケストラも、一切の手がかりなく完全に独力でこの長大な交響曲の譜読みを進める必要がありました。何より最大の問題となったのは、編成と難易度でした。この交響曲は、当時のラジオ・シンフォニーの在籍人数を遥かに超える100名もの大人数を要求し、かつ演奏の難易度も非常に高いものだったのです。届けられたスコアを最初に開いた時、エリ阿斯ベルクは絶望に頭をかかえたと言われています。

しかし死線を越えて演奏への決意を固めたラジオ・シンフォニーはもはや諦めませんでした。「レニングラードに捧げられた音楽を市民に届けたい。」その不屈の意思は、あらゆる困難を越えていく原動力となりました。足りない奏者は軍と掛け合って（ジダーノフの威も借りて）兵士として戦線に送られていたオーケストラ奏者を呼び戻し、何とか演奏に最低限必要な80名の人数を揃え、必死に練習を重ねていきます。そして、伝説となった1942年8月9日、ついにレニングラード交響曲の現地初演の日を迎えたのです。

特別輸送機で届けられたスコア（ショスタコーヴィチの書き込みや検閲印がある）



この歴史的な初演を砲撃に妨げられないように、前線部隊は初演直前にナチス＝ドイツ軍に対して一大攻勢を遂行し、敵軍の砲台を一時的に沈黙させることに成功しました。初演会場となった当日のフィルハーモニーホールには、レニングラード方面軍の司令官であるゴヴォロフ中将与その夫人はじめ、軍部の指導者陣が揃って臨席したということからも、当局のこの初演にかける本気度と覚悟が伺えます。



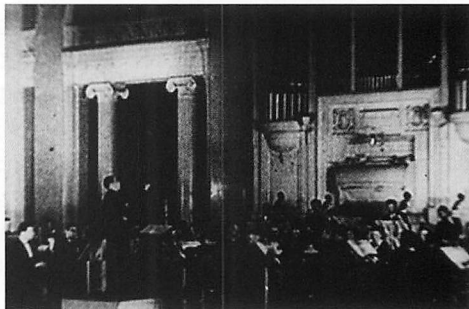
ラジオ・シンフォニーによるレニングラード交響曲  
現地初演のポスター

この日、悲惨な初回練習から死に物狂いでこぎつけた復活演奏会から4ヶ月を経て、ラジオ・シンフォニーは奇跡とも言える不屈の精神で、ショスタコーヴィチが愛する故郷レニングラードの為に書き上げた交響曲第7番を現地初演させました。食糧も電気もろくになく、日常的に爆撃が市民の命を奪い続ける、戦時下という極限状態で成し遂げたそれは、クラシック音楽界に名を残す歴史的な偉業でした。戦火に苦しむ満員の聴衆で埋め尽くされたホールに響き渡った交響曲の調べは、風前の灯火にあったレニングラード市民に多くの勇気と希望を与えることになったのです。

演奏の様子は市内至るところに取りつけられたスピーカーから街中に流れ、さらにナチス＝ドイツと対峙する最前線にも巨大スピーカーが設置され、両軍の兵士たちに向けて大音量で届けられました。レニングラード防衛の兵士たちはその演奏に勇気づけられ、逆にナチス＝ドイツの兵士たちは自分たちが死に物狂いで陥落させようともがいているその街中で演奏会が開かれているという事実絶望しました。

この日の初演の様子は、実際にその演奏を聴いた当事者たちの伝聞でしか残っていません。電力不足によって録音がされなかった初演の演奏がどのようなものであったのか、その場にいなかった者が客観的に判断することは今

日もはや不可能です。しかし、この日、初演を耳にした全ての人たちがその奇跡を共有し、自分たちの街に捧げられた交響曲によって市民に灯された勇気が、900日に及ぶレニングラード包囲を最後まで耐え抜く力に繋がったという事実が、この日の演奏の全てを物語っているでしょう。



ラジオ・シンフォニーによるレニングラード交響曲現地  
初演の様子を伝える唯一の写真

#### ♪アウローラ管弦楽団とレニングラード交響曲

レニングラード交響曲はクラシック音楽の長い歴史の中でも、一際特別な音楽として異彩を放っています。100万人もの亡くなった人たちのことを想いながら演奏される曲など、古今東西どこにも存在しません。

ここであえて私(筆者)の個人的エピソードを語ることをお許し頂きたいのですが、今回の楽曲解説を書くにあたって、最初は従来のように各種文献や資料からの抜粋を元にした解説文を書いていました。昨年の9月頃のことです。しかし一旦完成した時点でその草稿は全て破棄し、改めて今回の文章を一から書き直すことにしました。資料をかき集めて楽曲解説を書くことは簡単な作業でしたが、そうして一度書き上げた解説文は、どこか第三者的であり、この「レニングラード包囲戦」という悲劇を、歴史の出来事として客観的な説明に終始させた「心が入っていない」文章のように感じてしまったのです。

私はこのレニングラード交響曲を、それぞれ異なるオーケストラで3回演奏した経験があり、今回が4回目の演奏となりますが、演奏する毎にある種の違和感を感じてきました。それは、「この作品はそのスケールの巨大さから、戦争を壮大な歴史絵巻としてマクロな視点で描いているように思わせつつ、しかし作曲家の本当に描きたかった本質は、もしかしたらもっとミクロなもの、つまり戦争に巻き込まれた一人一人の心に寄り添った、“人間”がテーマの音楽なのではないだろうか？」という疑問です。





## 曲目解説

レニングラード交響曲を壮大な戦争物語として、歴史の名シーンが如く壮大に、描写的に演奏するというのは、音楽のアプローチとして確かにありなのでしょう。しかしこの交響曲の本質は、私たちと同じささやかな幸せの中を生きる市民一人一人が、戦争に巻き込まれ、友達が死んだ、家族を失った(～ターニャのように～)そういった悲しみに寄り添う人間ドラマなのではないか、とも思えてきたのです。

そして、一旦書いた楽曲解説を白紙にした矢先、突然かかってきた一本の電話。それはNHK番組制作を手がける制作会社のプロデューサーの方からで、「レニングラード包囲で取り残されたオーケストラ、ラジオ・シンフォニーにまつわるドキュメンタリー番組の制作に参加しないか」との打診でした。詳細は今回のチラシの裏面に譲りますが、アウローラ管弦楽団の団員一同は、このNHK BSプレミアムの音楽ドキュメンタリー番組「玉宏 音楽サスペンス紀行 ～ショスタコーヴィチ・交響曲第7番」(2019年1月2日放送)にて、レニングラード交響曲の現地初演を成し遂げたオーケストラの再現ドラマシーンの演奏・演技指導に関わらせて頂くという貴重な機会を頂きました。

地獄の中に市民と一緒に取り残された唯一のオーケストラ、ラジオ・シンフォニーの団員たちは、飢えと寒さに苦しみ死者を出しながらも、「こんな時こそ市民に音楽を届けたい」という想いの元、絶望的な状況にあっても苦しむ人々を勇気づける為に再び楽器を手にして立ち上がりました。命懸けで音楽を届け続けたオーケストラ奏者の軌跡を辿るドキュメンタリー制作に関わる体験を得て、同じオーケストラ奏者としての共感を持って今回このレニングラード交響曲を演奏できるというのは、私たちアウローラ管弦楽団にとってはまさに僥倖だったと感謝せずにはいられません。

例えば、今の東京が戦争で瓦礫の山になって、100万人犠牲になって、自分の身の回りの家族や友達を失って、オーケストラのメンバーもたくさん亡くなって、悲しみと絶望に打ちひしがれた、そんな自分の目の前に、楽器がある。そこで自分が奏でるのは、どんな音楽になるのだろうか。

昨年9月に一旦書き上げた、素人が知ったかぶりで書き上げた頭でっかちな解説文は、破棄しました。レニングラード交響曲は現代に於いて様々な解釈がされる謎多き作品で、純粋にナチス＝ドイツの侵略とそれに対する正義の勝利を描いたとする歴史物語としての解釈もあれば、いやこれは返す刀でファシズムだけではなくスターリン体制も批判しているのだという逆説的でシニカルな解釈もあり、さらにはこれはある特定の敵を示したものではなく、この世

に蔓延るあらゆる普遍的な悪意に対する抵抗であるという抽象的な解釈もあります。そしてその全てがおそらく正解(または正解の一部)であり、そのいずれの解釈であっても名演となり得る多層的・多面的な姿が、この交響曲の傑作たる所以であると思います。

そして、いずれの解釈にあっても共通であるのが、そこには犠牲となった人間の悲劇があるということ。巨大な悲しみに翻弄される“人間”を主役に行っていること。それが全ての解釈を一つに結びつける、この交響曲の核であり、本質なのではないか。この交響曲を何回も演奏し、何百回も聴いていると、そんな気がしてくるのです。

本日のアウローラ管弦楽団の演奏は、オーケストラとして何かしらの統一的な解釈(壮大な戦争ドラマにしようとか、いやショスタコーヴィチが裏に隠した秘められたメッセージを掘り起こそうとか)を明示的に発するものではありません。それでも、この大作に対する畏敬の念を込めて、一つ一つの音に意思を吹き込めるように、楽譜の隅々まで血を通わせられるように、真摯に向かい合って練習を重ねてきました。そして、このレニングラード交響曲を“人間”の心に寄り添うヒューマンイズムの音楽として、奏者一人一人が人間の視野から見つめた人間の物語として描くことができれば、と願っています。



撮影収録に参加する当団コンサートミストレス(2018年10月)



## 曲目解説

以下の楽章毎の楽曲解説は、この長大な交響曲を初めてお聴きになる方向けに、楽曲理解の手助けになればという思いで、描写的な表現を盛り込む形で文章を起こしています。前述の通り様々な解釈ができる作品ですので、読む方によっては異論あるかと思いますが、あくまでもひとつの聞き方としてご一読頂ければと思います。

### ♪第1楽章

演奏時間25分を要する長大な第1楽章は、ショスタコーヴィチがそれぞれ「人間の主題」、「自然の主題」、「戦争の主題」と表現した、3つの旋律で組み立てられます。

冒頭、弦楽器により市民の健康的な生活を描いた「人間の主題」が力強く奏でられ、堂々と幕を開けます。戦争前のレニングラードの街中を人々が闊歩していく様子を思わせる行進曲風の音楽が続き、社会的な日常生活を過ごす人々が持つ正のコミュニケーション、すなわち笑顔での会話や、冗談を交し合うような、ややスケルツォ的な要素も伴い、音楽は陽気に進行します。



戦前の活気あるレニングラード市内の様子

「人間の主題」たる第1主題が力強いトーンのまま一区切りつくと、活気ある生活・賑やかな街並みの風景が次第にぼやけていき、替わりにロシアの大平原の風景が眼前に滲み込んでくるように、音楽の場面が切り替わります。第2主題はうってかわって抒情的な「自然の主題」。見渡す限り果てしなく広がる、美しく澄んだロシアの大自然の描写です。悠久の河の流れを思わせる中低弦のうねり。それまでの人間的な行進曲風の4分の4拍子とは異なり、拍子感は曖昧で希薄になり、音楽の主役がそれまでの人間のリズムから、連綿たる自然のリズムへと移り変わったことを表します(自然現象に拍子という概念はありません)。規則的な拍子から解放された旋律は、縛られるものもなく自由に舞い踊り、終止もはっきりせず中途半端に消えていくような調べが幾層にも折り重なっていきます。大地からは

清水が滾々と湧き上がり、果てしない大空の中には音が生まれては溶け込んでいくが如く、旋律は一見すると意味なく彷徨っているようでいて、その実、全ては森羅万象を司る母なる大自然の懐の内、その御手の上で遊びます。



今も変わらないレニングラード近郊に広がる大自然

やがて現れるピッコロのソロは、さらに詩的で象徴的に自然の息吹を奏でます。抑揚がほとんど指定されていない譜面をそのまま音にすれば、水のせせらぎのように旋律がさらさらと流れ、ここに人間的な「言葉遣い」(アーティキュレーション)を入れる余地はありません。そして旋律の音域が高音域となるのは、果てしない天空の高さ、澄み切った空気を表現するショスタコーヴィチの天才的な筆でしょう。空の高みを表すかのように、最後に現れるヴァイオリンのソロはさらに高音で薄い音色に向かい、遥かなる空に音が解き放たれ、吸い込まれていきます。それはまるで、手の平に白い鳥の羽を乗せて、そっと空にかざすと、透明な風に吹かれて羽が空高く舞い上がり、大空の中に消えていくかのように。

ショスタコーヴィチは当初この楽章に「戦争」という副題をつけようとしていました。交響曲としての抽象性を高める為に副題は後に削除されましたが、少なくともショスタコーヴィチがこの楽章に、巨大な敵意の襲来、蹂躞、破壊、そして悲劇に絶望する人間の姿を描く意志があったことは間違いありません。

その描写がついに始まります。展開部。「戦争の主題(または「侵略の主題」)」と呼ばれるテーマがひたすら繰り返される、長大なボレロ。健康的な「人間の主題」、抒情的な「自然の主題」という2つのロシアの情景が十分に表現された後に続くこの凄惨な場面は、言うまでもなく「人間を肯定する行進」に対する挑戦、即ち「人間を否定する行進」であり、ひとに在らざるものたち、獐猛な悪意の、人類に対する宣戦布告です。

広大な地平線の遥か彼方から、小太鼓のリズムに乗って軍隊行進曲(軍靴の足音)が聴こえてきます。始めはコ

## 曲目解説

ミカルですが、何度も何度も繰り返されながら、少しずつ音量を大きくして近づいてきた彼らの姿を見るにつれ、それはとてつもなく恐ろしいものだということに私たちは気づきます。彼らはやがてその邪悪な正体を表し、凶暴な牙を剥き出しにして、レニングラードの街並みに、あるいは人々の心に、破壊の限りを尽くすのです。

音楽はついに、戦争の狂気が取り憑いた極めて暴力的で凄絶な展開に突入します。どこまでもグロテスクに膨張し、崩壊と紙一重まで音量を上げていくオーケストラ。それはあたかも、一度始まってしまった破壊衝動はもはや止めることができず、来るべき破滅の瞬間まで雪だるまのように肥大化しながら転げ落ちていくしかないと言いたいかのようです。「死の行進」は、最後の崩壊の一撃に向かってフルパワーで暴走していきます。



爆撃されるレニングラード

破壊のリズムを刻むボレロは頂点の一撃で粉々に砕け、巨大な大音響による「人間の主題」がオーケストラ全体で回帰される再現部に突入します。冒頭であれほど健康的に奏でられた「人間の主題」は、ここでは悲痛な大絶叫で見る影もない姿に変わり果てています。ショスタコーヴィチ本人が、犠牲者へのレクイエムと位置づけ、「そこには母親の涙があるかもしれないし、涙すらも残っていないほど深い悲しみの感情であるかもしれない。」と語ったこの場面は、かなり長い時間にわたって悲劇的な咆哮が繰り返される為、ややもすると「長い」、「しつこい」と感じるかもしれません。しかし人間というのは、親しい人が命を落として、

それをほんの短い間だけ悲しんで、その次には別のことを考え始められるようには作られていない生き物です。この場面のように、時が経つのも忘れて、いつまでも嗚咽を続けるのだと思います。



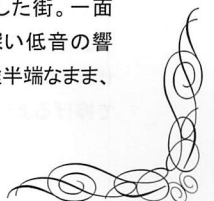
瓦礫のレニングラード

果てるともなく続く慟哭の嘆きは、しかし体力の限界によって次第に力をなくし、しおれるように崩れ落ちます。悪意は去り、静寂が訪れますが、悲しみは癒えません。沈黙から浮かび上がるように始まる、ファゴットのソロによる長大なモノローグ。「自然の主題」を元にした旋律ではあるものの、ここでは人間の声と同じ音域で歌われます。その様は、全てが崩壊した瓦礫の山の中で生き残った人が、愛しい家族の亡骸を前にして、その手をとりながら、何かを訴え、虚脱感に襲われながら、なおもブツブツと独り言を呟き続けるかのよう。彷徨う心の内をさらけ出すような、孤独な音楽です。

(この独り言のつぶやき。第8交響曲でもそうですが、ショスタコーヴィチは悲劇や破滅のクライマックスの後に、このように特定楽器の長大なソロによる長いモノローグ(独白の場面)を置く傾向があります。一見冗長に思えるかもしれませんが、実はこのモノローグにこそ、ショスタコーヴィチの「本音」が隠されているのかもしれません。)

長かった第1楽章も、悲劇の果てに終わりが近づきます。ホルンによる不気味な胎動がモノローグを遮りますが、次には思い出したかのように音楽が正気に帰って、再び穏やかに時は流れ始めます。弦楽器によるハ長調の響きが「人間の主題」を暖かく奏で、ようやく人間の暖かさが音楽に戻り、悲しみにくれる人たちの心を優しく包み込み始めます。

しかし、遠くから再び「戦争の主題」が亡霊のように不気味に顔を現します。まだ終わっていないぞ、まだ続くんだぞ、と。不気味な死神の影がちらつく、廃墟と化した街。一面見渡す限り瓦礫の地平。鉛色の空。しかし深い低音の響きによって死神の影は踏み潰され、音楽は中途半端なまま、唐突に、そして完全に沈黙します。



## 曲目解説

### ♪第2楽章

第2楽章は、戦争前の平和だった頃を懐かしむかのような牧歌的なスケルツォで、長大なレニングラード交響曲の中であって演奏時間も短く、間奏曲の役割を果たします。木管楽器と弦楽器を中心とした響きは、どこか物悲しく、ロシア人好みの（そして日本人のメンタリティー的にも好まれる）「憧憬」の感性に寄り添っています。弦楽器の純朴な前奏に続いて、憂いに満ちたオーボエが切なく歌いますが、それは決して感情過多な表現に流れることなく、情感を薄いヴェールに包んでいるかのようです。

次第に途切れそうになる音楽。しかし唐突に焦燥感に駆られた速いテンポの別のスケルツォが挿入され、雰囲気が一変します。小クラリネットが道化のような金切り声で叫び回ると、金管打楽器による勇ましい行進曲が絡まります。これは何を表している場面なのか。悲劇や絶望への不安なのか、民衆のお祭なのか、軍楽隊のパレードなのか、明確な解釈はありません。音楽は目まぐるしく拍子を変えながら空騒ぎを続けますが、その騒ぎが収まると、冒頭の物悲しいスケルツォと哀愁のテーマが憂鬱の度合いを深めて帰ってきます。

フルートの囁きと、バスクラリネットの渋い声による、くすんだモノローグ。霧の向こうで音楽が鳴っているかのような、「夢うつつ」の場面が続きますが、最後は、平和だった過去を懐かしみながら、平安な気持ちに満ちた長調の響きで、まどろむように、そっと眠りに落ちて終了します。

.....

レニングラード交響曲は長大な作品ですが、第1楽章は劇的な構成ながら描写的であり独立した交響詩のようにも考えられ、また第2楽章は位置付け的には間奏曲です。従って、この交響曲の真に交響曲たる姿は、第3楽章でようやくその全容を現します。ショスタコーヴィチの他の多くの交響曲がそうであるように、後半の楽章（3～4楽章）は切れ目なく続けて演奏され、音楽が一気に深化していきます。

### ♪第3楽章

この交響曲の白眉ともいえる第3楽章は、広大な祖国を讃える偉大なアダージョ。祖国の大地で命の鼓動を刻む、全ての生命に捧げられた感動的な讃歌です。

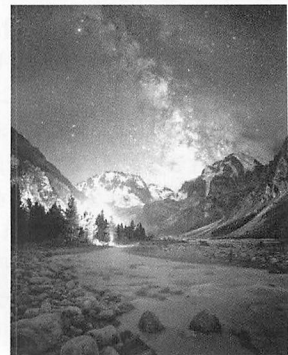
冒頭、木管合奏のコーラルが悲痛な祈りの調べを轟かせます。それは教会のオルガンの澄んだ響きが行く中で捧げるような敬虔な祈りではなく、心の痛みを抉り出す

ような悲しみに満ちた祈り。まるで、火薬の匂いが立ち始める焼け野原の大地で、瓦礫の山からぼろぼろになった小さな足踏みオルガンを掘り出して、濁った響きをかき鳴らしながら一心不乱に救いを訴えるような、絶望の叫びにも似た祈りです。しかし、続いて奏でられる弦楽合奏の美しい調べが、木管合奏の悲痛な祈りを浄化するかのような慈悲の祈りで、その痛みを癒します。

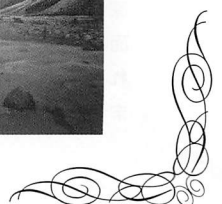
木管合奏と弦楽合奏の、相反する祈りの掛け合いが続くと、やがて低弦の深いピチカートに導かれ、音楽が動き始めます。心臓の鼓動のように絶え間なく続くピチカートのリズム。その脈の一拍一拍が生命の時間を刻みます。絶えることなく続く鼓動に乗って、まずはフルートの牧歌的で澄み切った旋律が、そしてヴァイオリンの瞑想的な息の長い旋律が、天と地の間をたゆたうように紡がれていきます。再び慈悲の祈りが弦楽合奏で奏でられますが、そこから音楽は唐突に激しい躍動を伴って高潮します。

静寂を打ち破る激情的な中間部。荒野を馬で疾走するかのような勇猛なリズムに乗って、ヴァイオリンが躍動感に満ちたエレジーを颯爽と歌います。ここまで沈黙していた金管群も咆哮し、ついには冒頭の悲痛な祈りが最強奏で鳴り響く壮大な金管コーラルにまで劇的に上り詰めます。頂を越えた音楽は次第に走りやめ、馬を駆けた旅人が再び休息を取り、どこまで走っても変わることのなかった広大な原野に身を投げ出すと、再び前半と同様に命のリズムが脈打ち始めます。


今度はヴァイオリンによる長大なパートソロが牧歌を奏でると、いよいよこの楽章の最大のクライマックス、弦楽合奏が渾身の力で奏でる2つの祈りを迎えます。悲痛な祈りと慈悲の祈りがひとつに融合し、漲るような生命の力をふりしぼって歌い上げる感動的な讃歌。ショスタコーヴィチは何と崇高で偉大な音楽を遺したのでしょうか。満天の星々の下で祈りを捧げるような、高貴な弦楽合奏の響き。そこには一切の邪な心はなく、天と地の狭間にある世界に息づく生命を崇拜し、讃えます。



ロシアの大自然  
満天の星空







## 曲目解説

しかし、そんな溢れるばかりの命の息吹も、やがてそっと息を潜め、来るべき何かに怯えるかのように沈黙していきます。低弦と打楽器による不気味な大地の胎動。彼方で轟く遠雷。そして音楽はそのまま途切れることなく終楽章へと続きます。

### 第4楽章

低弦の不気味な持続音に導かれて始まる終楽章。祈りの夜が終わり、やがて暁の空が紫色に染まり、周りに霧が立ち込めます。どこからか漂う弾薬の匂い。弦楽器が不明瞭な旋律を薄暗く紡ぐ中、オーボエとホルンがこの楽章の統一モチーフである、4つの連続音から成るシグナル音を無機的に掛け合います。(これはベートーヴェンの「運命」交響曲からの引用とも、「VICTORY」(勝利)を意味するモース信号のリズムを暗示するものとも言われます。)

そして再び迎える戦いの朝。一方的な侵略に蹂躪された第1楽章とは異なり、この最終楽章の戦いの描写には決然とした抗戦の意志が込められています。変拍子が頻繁に交錯する前半部はトリッキーな動きで聴き手を惑わせながら(この交響曲最大の技術的な難所です)、不規則に、しかし少しずつ闘争の音楽を盛り上げていきます。左右に分かれた金管楽器群が戦いの火蓋を切ると、やがて音量を上げながら火力を増していき、ついには打楽器の乱打も伴って激しい砲撃戦を繰り広げるに至ります。片側の金管楽器群が邪悪な攻撃音を放ち、それに対抗してもう片側の金管楽器群が戦いのシグナル音で応戦する爆裂的な攻防の末、オーケストラ全体が巨大なクライマックスを築き上げます。

音量が頂点に上り詰めた後、闘争の音楽は次第に落ち着きを取り戻し、唐突にゆっくりとした中間部となります。ここで戦場に流れるのは、戦争の犠牲者を悼む英雄的なサラバンド(荘重な三拍子の舞曲)です。力強いリズムに乗った厳しい旋律が人々の感情を揺さぶりますが、やがて舞曲の足取りは力を弱めていき、足場を失ったかのように拍子感の希薄な、瞑想的で鎮痛な世界に誘なわれていきます。

あたり一面、極限の緊張感で空気が張り詰める中、遠くからかすかに聞こえてくるシグナル音。誰もが身動きひとつ取れず、息を呑んでこの物語の結末を見守るのみ。旋律も、和声も、リズムも、全ての音はさらに深く、闇の深遠に沈んでいきます。

暗闇の中に身を潜め、蠟燭のかすかな灯りの周りに寄り添い、必死に手を合わせて祈る人々。しかしそんな彼らの小さな小さな祈りの声と蠟燭の光は、やがて十人集まり、

百人集まり、次第に力を増していきます。皆が思いをひとつにして紡ぎあげた「人間の意志の力」を表す旋律が、ついには一本の巨大な意思のうねりに収束し、その頂点でホルンがユニゾンで讚美歌のような力強い旋律を轟かせると、この長大な交響曲もいよいよその壮大なフィナーレの時を迎えます。

物語の最後に辿り着いた最終ページは、この作品の最初の一音目が鳴らされた時から約束されていた結末、輝かしい勝利の音楽です。金管楽器によって吹奏される力強いファンファーレが勝利の訪れを高らかに宣言し、迎い一面が勝ち鬨に包まれます。しかし、そのファンファーレの輝きはどこか鈍く、歓喜の歩みの中に重苦しい重圧のような黒い感情が紛れ込み、拭いきれない不安の影を落とします。

音楽は冒頭と同じハ長調に回帰すると、さらに歩みの速度を落とし、ここに至って第1楽章の「人間の主題」が金管楽器で荘厳に再現されます。勝利のファンファーレの後に開かれた、未来へと向かう行進。あからさまに見せつけられる無邪気な喜びのハーモニー。未来の扉の向こうから眩く降り注ぐ光に照らされる市民たちを描いたようなシーン(その中にはきっと軍人たちも独裁者もいる)。しかし光の方を向いた人々の反対側、光の当たらない背後では重苦しい感情はさらに膨れ上がり、行進の足元を絡み取る黒い枷のように、歓喜に沸く人々に気づかれぬままにまとわりつきます。

この黒い影は何者なのか。光輝く未来の為に犠牲になった、消し去れない暗黒の過去なのか。「目前の敵は退けた。私たちの犠牲によって。しかしこれは終わりと同時に始まりでもある。平和な生活がこれから守っていけるように、再び悲劇が起きないように、それは生き残った人々の意思にかかっている。本当の試練はこれからなのだ。」と、人々の過ちによって夥しい命が奪われたという暗黒の記憶が、生き残った人々に警鐘を鳴らしているかのようにも聞こえます。

しかし、その警鐘も、厳しい戦いを生き残って輝かしい未来の光に喜ぶ人々には届いていないのかもしれない。闇と光の狭間、過去と未来の境界に立つ市民たち。歓喜のファンファーレと、圧倒的なシグナル音の連呼(それは勝利のリズムなのか、運命の警告なのか)によって影はやがてかき消され、勝利を称える祝砲の爆音(それは未来の爆撃音に変わるかもしれない)によって、鼓膜を劈くほどの凄絶な大音響の中、轟音と共に交響曲は幕ごと崩れ落ちて終止します。



## 【エピソード】過去から未来へと語り継がれる音楽

♪2019年5月11日 新時代の東京にて

ラジオ・シンフォニーがレニングラード交響曲を初演したエピソードによって、「過酷な戦争の時代に音楽が人々の心を救った」という逸話が生まれ、後世に語り継がれてきました。それから70年以上が経ち、血みどろの殺戮に彩られた20世紀が終わり、世紀を跨いで21世紀を生きる私たちの社会に於いて、音楽は今も人々の心に大事なものとして息づいています。音楽が多様化して様々なジャンルが隆盛している今日では、クラシック音楽はその一ジャンルという位置付けに収まってしまいましたが、それでも今なお多くの人々の心をつかむ存在であり続けています。

そして現代。

第二次世界大戦で壊滅的な被害を受けた日本は、今では世界屈指のアマチュア・オーケストラ大国として生まれ変わり、毎週末には必ずどこかでアマチュア・オーケストラの演奏会が行われるほどの活況を呈しています。アマチュア・オーケストラの数は毎年増え続け、演奏人口も観客人口も確実に増えていることを実感します(よく言われる「クラシック音楽の人口が減っている」という説は誤解だと思います)。平成が終わり、令和という新時代を迎えた現代日本に於いて、オーケストラ文化は商業ベースではとまかく市民レベルではしっかり根づいていると言えそうです。

結成10年目を迎えた私たちアウローラ管弦楽団は、その記念すべき演奏会に、クラシック音楽史上でも最も巨大な歴史的背景を持った大曲、レニングラード交響曲に挑むことになりました。当団の演奏技術力を遥かに上回る、極めて高い難度を要求される難曲への挑戦となりましたが、この20世紀を象徴する記念碑的大作を通して、音楽が持つ力を、これから新時代を共に生きていく皆様に感じて頂きたい。その想いを伝えることが、本日の私たちの目標です。

お聴き苦しいところも多々あるかと思いますが、今までの10年間の歩みの総決算となる私たちの精一杯をお聴き頂ければ幸いです。

♪エピソード 少女の願い

2019年1月2日に放送されたNHK BSプレミアムの音楽ドキュメンタリー番組「玉木宏 音楽サスペンス紀行 ～ショスタコーヴィチ・交響曲第7番」では、ラストの最も感動的な場面に、「レニングラード交響曲の現地初演後に、一人の少女が指揮者エリヤスベルクに花束をプレゼントした」という逸話の再現シーンを象徴的に挿入していました。史実として伝えられるこの出来事ですが、その花束にはこんなメッセージカードが添えられていたそうです。

『レニングラードの音楽を守ってくれて、ありがとうございます。』



ラジオ・シンフォニーのレニングラード交響曲初演後、指揮者エリヤスベルクに花束を渡した少女


戦争で命を落とした少女ターニャが生きたかった未来。それは花束の少女が花を摘みながら願った、音楽が人々の心の糧となる世界。花を愛で、音楽を愛でる、そんな美しい世界を目指し、その想いをさらに次の世代に伝えていく為に、私たちは今この世界を生きています。

レニングラード交響曲は壮大なドラマを描いた極めて大規模な音楽であると同時に、その一方で一人一人の人間の心、悲しみや、人や自然を愛する心、平和への祈りに寄り添った、ヒューマニティ溢れる人間讃歌でもあります。

新しい時代が幕を開けた令和元年5月11日。この素晴らしい人間讃歌を奏でる本日の演奏会が、音楽を心の糧にして生きる皆様と、新時代への希望を共に願う一時となることを願って、私たちの結びの言葉にしたいと思います。

ロビーにて、当団の過去の演奏会のパンフレットを無料配布しております。ぜひお手に取って頂き、これまでの当団の演奏記録をご一読頂ければ幸いです。





これからの演奏会

# Schedule

190511

アンケートにお名前とメールアドレスを記載して頂いた方には、招待チケットをご用意させていただきます。ぜひ多くの方のご来場をお待ちしております。

## サマーコンサート2019


日時 2019年7月13日(土) 13時30分開演  
場所 杉並公会堂(大ホール)  
指揮 高橋 勇太  
曲目 ピアノ協奏曲第3番ニ短調(S. V. ラフマニノフ) ※ピアノ独奏:三好 朝香  
交響曲第2番ニ長調(J. ブラームス)

## 第22回定期演奏会

日時 2020年1月11日(土) 13時30分開演  
場所 すみだトリフォニーホール(大ホール)  
指揮 田部井 剛  
曲目 カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」(S. S. プロコフィエフ) ※合唱:混声合唱団コール・ミレニアム  
交響曲第4番ヘ短調(P. I. チャイコフスキー)

## 第23回定期演奏会

日時 2020年6月7日(日) 13時30分開演  
場所 すみだトリフォニーホール(大ホール)  
指揮 米津 俊広  
曲目 鋭意検討中



団員募集

# Join us!!

## アウローラ管弦楽団では団員を募集しています

当団では新しいメンバーを募集しています。当団の活動に興味を持たれた方は、ぜひご連絡ください。団員一同お待ちしております。

- ◇練習日時 : 演奏会2~3ヶ月前から日曜日の午前  
(次回定期演奏会は10月下旬から練習開始予定)
- ◇練習場所 : 都内施設 (おもに江東区・葛飾区)
- ◇参加費 : 演奏会毎に2万円台 (入団費、団費、チケット負担はありません)
- ◇募集楽器 : 弦楽器全般 (いずれも若干名)  
※詳しくはお問い合わせください
  
- ◇連絡先 : 【メール】 [avrora@td-serv.net](mailto:avrora@td-serv.net)  
【ホームページ】 <http://www.avrora.me/>

**Оркестр «Аврора»**